

十二月のテーマ

捨てる生活



え・城谷俊也

執着心が 不良在庫をまねく

師

走となり、職場や家庭で大掃除を予定している人も多いことでしょう。新年に備えて、

普段は行なわないところを拭き清めていくと同時に、少なからず身の周りの不用となったものを処分することでしょう。捨てる物の多さに驚いたり、捨てる捨てないで、ひと悶着した経験をお持ちの人もいます。

ところで、この「捨てる」ということは、純粹倫理において、大きな意味を持っています。倫理の学習・実践を通じて目指すのは「純情(すなお)」な心境です。『万人幸福の葉』には「ふんわりとやわらかで、何のこだわりも不足もなく、澄みきった張りきった心、これを持ちつつけることであります」と表現されています。そのため、エゴ、わがままを捨てること大きなテーマとなるのです。

*

ある経営者が体調を崩し、頻繁に病院での検査を受けていました。治療を続けていたものの、なかなか改善の兆しが見えません。日頃

から「病気は生活の赤信号」と学んでいた社長は、思い立って倫理指導を受けました。

これまでの病状を詳しく語った社長は、そこで思わぬ指摘をされたのです。それは、倉庫に眠る不良在庫についてでした。その中には十年も前から眠っている商品もありました。売れる見込みのないことはわかっていたものの、処分できずにいたのです。

整理整頓をして、不要と思うものがあればキツパリ捨ててみることを教わった社長は、埃をかぶっていた不良在庫を処分しました。その後、定期的に倉庫の整理をするようになってからのこと、数値に改善が見られ、やがて医師も驚くほど病状が改善したのです。

この経営者が捨てたのは、目に見える物としては、倉庫に長らく眠っていた不良在庫です。しかしこのことを通じて、(安く売るのは面白くない。さりとて捨てるのももったいない)と物に執着して、溜め込んでしまう心を捨てたのです。それは先に示したエゴ、わが

まま

に他なりません。

こうしてみると、純粹倫理の中でも「捨てる」実践は、経営者にとって重要度の高い実践といえるでしょう。倫理運動の創始者である丸山敏雄も、著書『清き耳』の中でこのように指摘します。

倫理の生活は、これを学的に展開すると「倫理大系」となり、実践の目標として標語に表わせれば『万人幸福の葉』十七カ条となり、(中略)これを一つにまとめて日々の実行にひきまげけると「捨てる生活」となる。

経営者として資質向上を遂げていくための、捨てる実践のチャンスは、日常にあります。本紙の前身では、我欲・わがままを捨てるという方向でトラブルの解決に臨む時、トラブルそのものの解消はもとより、人間的な成長が期待できることが示されていました。

病気やトラブルに限らず、日常生活の中にある様々な課題や問題は、わがままを捨て、純情(すなお)な心に迫るチャンスと捉えていき

たいものです。